

Title	『金瓶梅』の上京場面にみられる歌唱描写：解説と訳注
Author(s)	田中, 智行
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2024, 2023, p. 1-9
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/97318">https://doi.org/10.18910/97318</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# 『金瓶梅』の上京場面にみられる歌唱描写——解説と訳注——

田中智行

以下に訳出するのは、『金瓶梅詞話』第七十回および第七十一回で歌われる戯曲の一節である。

この二回は、主人公の西門慶が朝見のために清河から東京（汴京）へと上る場面となっている。上京中は主に官界の男社会が描かれ、死んだ李瓶児が西門慶の夢に現れる以外、女性がほぼ描かれることのない、『金瓶梅』ではやや異質な場面であるが、本稿では東京の高官らの宴において歌われる、戯曲中の套曲ふたつを訳出する（なお西門慶は第五十五回にも上京しているが、その箇所本文は一般に補作と見なされている）。

まず一つ目は第七十回、あらたに光祿大夫太保に就けられた朱勳を祝いに、太尉の称号を有する高官六名が訪れた場面で歌われる曲。西門慶は朱勳に謁見すべく参上しているものの、このときはまだ朱勳の前に進み出てはいないので、この歌の上演を直接目にはしていない。主要登場人物が誰ひとりいない場で歌われる曲が全文引用されるのは、全作中でこの箇所の他にない。

歌われるのは李開先『宝剣記』の幕切れ近い第五十齣、引き出された高俅父子の目の前で、林冲がその行状を暴きたてる套曲（組歌）であるが、この套曲と首曲の曲牌（旋律）や歌い出しが共通する高官賛歌があり（『詞林摘艶』辛集では丘汝成の作とされ「太師に上る」と題される）、李開先はそのパロディとして林冲の歌を書いたことが指摘されている<sup>1</sup>。やはり高官の統治を頌する同種の曲が本作第六十五回、六黄太尉こと黄経臣を西門慶の邸に迎えての宴会で歌われていることも、第七十回の歌唱をさらに意表を突くものとしている。『宝剣記』は本作中で頻りに引用される戯曲で、以下に訳出する引用のすぐ前にも第三齣冒頭、太尉・高俅の富貴を描く台詞に基づいた描写文が置かれる。

以下の歌詞は、「すぐに酒が注がれ、席を決めて腰を下ろしたところへ、五人一組の芸人が出てきて、上座に向かい、箏に箏に琵琶、方響に篋篋、紫檀の拍子木の伴奏で、〔正宮・端正好〕（正宮は調名）の節から始まる組歌ひとつを歌った。まこと、余韻が梁をめぐるよう、清冽かつ美妙的な響き」との導入につづいて引かれており、引用の後は何事もなかったかのように宴が続けられる。しばしばリアリズム文学と呼ばれる作品にあって、あからさまにありえない光景を描いた箇所のひとつである。

翻訳の底本には『金瓶梅詞話』影印本（大安、1963）を用い、白維国・ト鍵校注『全本詳注金瓶梅詞話』（人民文学出版社、2017）などを参考に、適宜修正を施した。なお、訳注部分は筆者が現在進行中の『金瓶梅』翻訳<sup>2</sup>の一部となる予定である。

〔正宮・端正好〕

富貴を享け  
皇恩に浴し  
卑賤の出で  
高位に就く  
権柄をにぎって畿内に威をふるい  
君寵をたのんで君王に媚びをうる  
仁や義はまるで構いなし

〔滾繡球〕

夫役をつかって溜池を掘り

<sup>1</sup> Patrick Hanan, "Sources of the *Chin P'ing Mei*" (*Asia Major*, n.s., 10.1, 1963), pp.52-3.

<sup>2</sup> 『新訳金瓶梅』鳥影社。上巻（2018）、中巻（2021）は既刊。

子孫のためにと田地でんちを買う  
苦心くしんの策はみな我が身のため  
奸邪かんじや貪欲どんよくしほうだいにて  
他所よそごとなんぞは気にもせぬ  
おもねれば身は榮達  
たてつけば命も危険  
賢才けんさいを嫉んで  
小人しょうじんばらを可愛がり  
私怨しげんを晴らすためならば  
公こうの道を踏みにじる  
九重ここのえの君は聶きみ棧つんぼ敷き  
四海しがいの民は大混乱  
天網てんもう恢恢かいを気にもせず

〔倘秀才とうしゅうさい〕  
ことば巧みに  
天子をつかのま喜ばせるが  
忠誠しゅうせいを尽くし  
万国和楽へと力をいたすはずもなく  
ひたすら豪傑の足すくい  
世を混迷におちいらす  
隔靴搔痒かつかそうようむだばかり  
長患ながわづらいが医者をして  
天の理ことわりを滅茶苦茶に

〔滾繡球こんしゅうきゅう〕  
持ち合わせるは  
趙高ちようこうの鹿を馬というたくらみと<sup>3</sup>  
屠岸賈とがんかの犬を放てるはかりごと<sup>4</sup>  
学ばんとするは王莽おうもう<sup>5</sup>の  
臣下にあるまじき意こころ  
主君あざむき臍へそを燃もされた董卓とうたくのよう<sup>6</sup>  
なにをするにも糸竹しちくが伴い  
どこへいくにも兵士が囲む  
朝廷に入れば官やくにんは誰も恐れ

<sup>3</sup> 秦・趙高は、自らの権勢を示すために鹿を馬と言いつのって二世皇帝に献上し、皇帝に問われてこれは鹿だと答えた者を陥れた(『史記』秦始皇本紀)。

<sup>4</sup> 屠岸賈は春秋・晋の靈公の武官。靈公の寵を競う趙盾の格好をした藁人形をつくって羊の心肺を詰め、犬の神糞がそれを襲うよう訓練したのち、靈公の面前にて神糞は不忠不孝の者を見分けると称してこれを放ち、趙盾を殺害しようとした。ふたりは歴史上の人物だが、以上の話は史書にそのままの形では見えず、元・紀君祥の雜劇『趙氏孤兒大報讐』の冒頭で語られる。

<sup>5</sup> 新の皇帝。漢朝(前漢)を廢して自ら帝位についたが、後漢の光武帝に滅ぼされた。

<sup>6</sup> 後漢末の群雄で朝政を独占した董卓あぶらには專横なふるまいが多く、殺害されたあと死骸をさらされ、臍に灯心を据えて肥満した腹の脂を燃やされたという(『三国志』魏書・董卓伝への裴松之注、『英雄記』を引く)。

御上<sup>おかみ</sup>を恃<sup>たの</sup>んで虎の威を借る  
媚<sup>こ</sup>び諂<sup>へつら</sup>って悪党<sup>あくたう</sup>の仲間<sup>とも</sup>いりをする門客<sup>もんかく</sup>はいても  
刀劍<sup>とうけん</sup>とって奸賊<sup>かんぞく</sup>を切捨<sup>きりす</sup>てんとする人物<sup>じんぶつ</sup>はおらず  
野放<sup>のほう</sup>しのままにやりたい放題

〔尾声（終曲）〕

金甌<sup>きんおう</sup>の下にその名は無<sup>な</sup>く<sup>7</sup>  
青史<sup>せいし</sup>の中にその咎<sup>とが</sup>は残<sup>のこ</sup>る  
陰陽<sup>いんやう</sup>をおさめることも  
天地<sup>てんち</sup>の気を調<sup>ととの</sup>えることも弁<sup>わ</sup>えず  
国土<sup>こくど</sup>を売<sup>う</sup>り払<sup>は</sup>うことや  
夷狄<sup>いてき</sup>と結<sup>むす</sup>ぶことばかりを弁<sup>わ</sup>える  
身にまとう蟒衣<sup>ぼうい</sup><sup>8</sup>にかける  
玉帶<sup>ぎよくたい</sup>金魚<sup>きんぎよ</sup><sup>9</sup>をはずかしめ  
禄<sup>ろく</sup>は受けれど功績<sup>こうせき</sup>はなく  
なおも寝<sup>ね</sup>て食<sup>く</sup>う面<sup>つら</sup>の皮<sup>かわ</sup>  
手にする権勢<sup>けんせい</sup>をみな懼<sup>おそ</sup>れるが  
わざわざ迫<sup>せま</sup>れば悔<sup>く</sup>いても遅<sup>おそ</sup>し  
南山<sup>なんざん</sup>の竹<sup>たけ</sup>を尽<sup>つく</sup>くしても書<sup>か</sup>ききれぬ罪惡<sup>ざいご</sup>と  
東海<sup>とうかい</sup>の波<sup>なみ</sup>が乾<sup>かわ</sup>いたとて消<sup>き</sup>えさらぬ汚臭<sup>おけう</sup>は  
永久<sup>とわ</sup>の先<sup>まへ</sup>まで伝<sup>つた</sup>えられ  
人<sup>ひと</sup>は唾<sup>つば</sup>吐<sup>は</sup>き汝<sup>なんじ</sup>を罵<sup>のの</sup>らん

※

※

※

次に取り上げる歌は第七十一回、西門慶があらたに同僚となる何永寿と、そのおじにあたる宦官・何沂（歴史上の人物名では何沂に相当する）と、三人で宴を張る際に歌われる。

これは趙匡胤を描く羅貫中の雑劇『宋太祖龍虎風雲会』第三折における主役の歌で、『盛世新声』正宮、『詞林摘艶』辛集、『雍熙樂府』卷二（ともに作者名は記さない）にも収められる。ただし文字には違いがあり、本作中の引用は雑劇よりも曲選（特に『盛世新声』、『詞林摘艶』）に近い。第三折は、帝位にはついたもののいまだ諸国平定の途上にあつた主人公が大雪の夜おしおのびで丞相・趙普の家を訪れ、天下統一の策を論じる場面である。理想的な君臣の関係が描かれており、上に見た第七十回の歌と同様、西門慶ら情実によって動く「偶戯衙門」（作中の何沂の言葉。偶戯は人形劇）の官員たちの姿と対照させるためにこの箇所へ置かれていることは疑いない。

さらに劇中に描かれるのが他ならぬ宋の太祖であることも、同じ第七十一回の後半に亡国の皇帝・徽宗が登場し「朝歡暮楽」「愛色貪杯」などと描写されるのと、好一對を成す。上京の場面の直前（第六十九回）には、報国の勲功ある祖先をもち、代々招宣の位を継ぐ名家に生まれながら、遊興にうつつを抜かず王三官（王榮）なる人物が登場しており、祖業を蔑ろにする子孫として徽宗と王三官との姿はおそらく二重写しにされている。上に見た『宝剣記』の場合と同様、歌の引用によって作中の現実世界の混濁ぶりが浮き彫りにされており、

<sup>7</sup> 宰相たる器ではないの意。唐・玄宗は宰相を任じるとき、意中の人物の名を予め書き、その紙を机に置いておくのが常だった。そこへたまたま太子が入ってきたことがあり、金甌（金の鉢）もて名を隠し、太子に当てさせたという（唐・李徳裕『次柳氏旧聞』）。

<sup>8</sup> 龍をかたどり爪の数だけ減じた蟒の刺繍がある長衣。

<sup>9</sup> 黄金製の魚のかざりのある袋。高官が身につけた。

こうした明確にアイロニックな引用の集中していることが、西門慶上京の一段における戯曲引用の特徴といえるであろう。

何沂の邸では坊や(原文「小廝」)ら十二名に笛や太鼓を仕込んでおり、宴が始まると銅鑼や銅鼓が運び出され、まず器樂が披露される。しかるのち「笛太鼓の音楽が終わると、坊や三人が師範とともに宴席の前にて、銀箏と象板、三弦と琵琶にて、〔正宮・端正好〕の節から始まる組歌ひとつをうたった」と描かれ、以下の歌詞が引用されている。

〔正宮・端正好〕

水晶の宮殿

鮫にんぎょの絹きぬの帳とばり<sup>10</sup>

水晶の宮殿に光は射して

鮫の絹の帳に寒ささ沁しみみる

夜ふかまって

龍床りゅうしょうにて眠られず

宮門ぬけだし

都みやこ大路おおじへ忍び出る

おりしも空から降りる風雪

〔滾繡毬〕

蝶々がひらひら舞うように

柳絮りゅうじよがふわふわ散るように

氷の花を舞わせ

旋風つむじかぜはさすらい

白い玉ぎよくを踏んで

足取あしどりはせわしく

白衣<sup>11</sup>の両袖を覆って

烏紗うさの小帽なびを靡かす(烏紗帽は官帽)

ふと振り返り

鳳おおとりの楼たかどのみつめれば

瑠璃瓦るりがわらの鴛鴦えんおうはかき消され

ほどもなく

九重ここのえの宮殿は銀ぎぎはしの階

かたときに

万里の乾坤は玉ぎよくの粧よそおい

あたかも国土じゅう

粉で埋めつくされたかのごとし

〔倘秀才〕

鉄の桶よろしくとざされた幾重いくえの門

銅あかがねの獸面ノッカーの双環を鳴らしてみる

門をたた敲くわれこそは

万歳山<sup>12</sup>前の趙大郎なるぞ

<sup>10</sup> 鮫絹は南海の人魚が織るという絹。薄絹の美称。

<sup>11</sup> 原文「白襦」は士人の服装。このとき太祖は白衣の秀士に身をやつしている。

広間に來客ありやなしや  
灯下に書ふみを読んでいるなら  
その講説こうせつをうかがいに

〔呆骨朶〕

寒風と凍雪とうせつついて訪れたるは  
いそぎ相談したき密謀みつぼうあるゆえ  
あわてずともよい事柄ことづかわきまえた役人よ  
くるしゅうないぞ賢者けんしやよびよせる宰相よ  
国事さばく三公<sup>13</sup>の邸やしきにまちがいなく  
頭剃かみつたる三蔵<sup>14</sup>の姿はどこにもなし  
この席にて講説をうかがいたきもの  
——茶が入ったと耳元で叫ぶでない<sup>15</sup>

〔倘秀才〕

朕は漢の高祖のように  
未央宮びおうきゆうには住みもせず  
朕は唐の天子のように  
普陽宮しんようにて眠りもせぬ<sup>16</sup>  
翡翠かわせみの布団ふだんに寒々しきは金鳳凰きんほうおう  
傳説<sup>17</sup>を得たしとは願えども  
高唐<sup>18</sup>に赴くことは夢にみず  
これぞ君たる者のつとめ

〔滾繡毬〕

四海しかいを一人で統すべる身なれども  
三綱五常ひとのみちは奉じねばならじ  
幼き日より槍やら棒やら学べど  
孔門に参着せざりしことの口惜しさ  
『尚書』(書経)は何篇なるや  
『毛詩』(詩経)は何章なるや  
『礼記』を講じねば謙讓は会得できず  
『春秋』を論じれば興亡は教訓となる  
朕の

<sup>12</sup> 徽宗が開封の北東(艮)に築かせた良岳こんがくの異称だが、ここで太祖が口にするのはおかしい。

<sup>13</sup> 太尉、司徒、司空を指す。

<sup>14</sup> 原文「唐三蔵」。玄奘三蔵を指す。

<sup>15</sup> この一句は趙普の召使いに向けられたもの。

<sup>16</sup> 隋の煬帝のとき、のちに唐の高祖・李淵は晋陽(太原)あんぐうの行宮を預かっていたが、その子・世民(のちの太宗)は父に挙兵させるべく父の副官と謀り、酒に酔わせ、煬帝の宮女とぎに伽をさせて罪に陥れた(『新唐書』高祖本紀)。

<sup>17</sup> 殷の武丁(高宗)の名相。はじめ武丁の夢に現れ、探し出されて登用された。

<sup>18</sup> 宋玉の「高唐賦」ならびに「神女賦」(ともに『文選』巻十九)によれば、宋玉と雲夢沢に遊んだ楚の襄王は、かつて父の懐王が高唐の觀(物見台)で巫山の神女を夢に見て契ったことを聞き、その晩みずからも神女を夢に見たという。

うおう、とうおう、ぶんおう、ぶおう  
禹王、湯王、文王、武王に学び

ぎょう、しゆん、むね  
堯と舜とを宗とし

けい  
卿の

とじょかい  
房玄齡と杜如晦とが唐を

しょうか、そうしん  
蕭何と曹參とが漢を立てたるに並ばんには

汝の調和統治のはたらきを要す

〔尙秀才〕

卿は申すか『論語』には

朝廷おさめる方略ありと

なんと半分だけにて

たなごころ、うち  
山河は掌の中なりと

聖人の道は天のごとく測りがたし

のぞ、けいてん  
赤い垂れ幕<sup>19</sup>を臨んで經典談じるは

べにげしょう  
宴ひらき紅化粧はべらすより余程まし

講義を聴きおえれば気分は爽快

〔滾繡毬〕

銀の台にかがやく華燭

金の炉にうずまく線香

大兄よ、みずから旨酒を注がれるな

姉上よ、じきじき美杯を献じずとも

卿は言う

そうこう  
糟糠の妻はだいじにせねばと

朕は想う

ひんせん  
貧賤の交わりわすれはせぬと

諺にも

“見かけの強さより内なる強さ（内助の功が大事）”

“賢妻の夫にわざわいなし”と

朕が卿を得たるは

たいこう、いじん  
太甲が伊尹に出会ったようなもの<sup>20</sup>

卿が姉上娶ったは

りょうこう、つれそ  
梁鴻が孟光と連添ったようなもの<sup>21</sup>

福寿の末長く続かんことを

〔尙秀才〕

とこ  
床に就いては

歴代の君主を論評し

目を閉じるや

興国と亡国を考察す

<sup>19</sup> 原文「絳帳」。後漢・馬融が赤い紗の垂れ幕のある高堂で講義した故事を踏まえる（『後漢書』馬融伝）。

<sup>20</sup> 太甲は殷の第二代の王。即位当初は暴虐だったため大臣の伊尹により追放されたが、三年のあいだに悔悟したので改めて伊尹に迎え入れられ、善政を敷いた。

<sup>21</sup> 梁鴻の妻・孟光は夫を敬い、食事を出すさいに膳を目の高さに捧げたことで知られる（『後漢書』逸民伝）。

ために日夜眠りもせずよろず物を思えり  
楽しい夜の短さを憎むのでもないが  
寂しい晩の長さを恨むわけでもなし  
心配の種は数知れず

〔滾繡毬〕

憂<sup>うれ</sup>わしいのだ  
纏<sup>まと</sup>う衣<sup>ころも</sup>もない宿駅の人夫が  
憂<sup>うれ</sup>わしいのだ  
明日の糧<sup>かて</sup>すらない家が  
憂<sup>うれ</sup>わしいのだ  
路地の奥に昼から寝ている望みなき貧者が  
憂<sup>うれ</sup>わしいのだ  
うら寒い窓辺で夜の眠りにつく書<sup>かみ</sup>読む者が  
憂<sup>うれ</sup>わしいのだ  
こごえる妻が夫をうらんで叫ぶのが  
憂<sup>うれ</sup>わしいのだ  
ひもじい子がおっ母<sup>か</sup>さんに泣くのが  
憂<sup>うれ</sup>わしいのだ  
船<sup>ふね</sup>を漕ぐ者が川の波風におびやかされるのが  
憂<sup>うれ</sup>わしいのだ  
車を駆る者が商いのためとて万里を行くのが<sup>22</sup>  
憂<sup>うれ</sup>わしいのだ  
無位の賢者が暮らしていけぬのが  
憂<sup>うれ</sup>わしいのだ  
鎧<sup>よろい</sup>をいそぎ着けて防戦に赴く者が  
数え上げれば  
嘆かわしくも傷<sup>いた</sup>ましい

〔尙秀才〕

憂<sup>うれ</sup>わしきは民草の苦しむこと  
御榻<sup>ぎょたつ</sup>で心のみだされて（御榻は天子の腰かけ）  
悩<sup>なや</sup>ましきは小康も保てぬこと  
寡<sup>か</sup>人は夢にもなやめり  
北のかた太原府は劉崇<sup>りゅうすう</sup><sup>23</sup>が占める  
しばらく丹鳳<sup>たんほう</sup>の宮闕<sup>きゅうけつ</sup>を離れ  
みずから緑青<sup>ろくしょう</sup>の陣幕を擁し  
まず河東<sup>かとう</sup>の上党<sup>じょうとう</sup><sup>24</sup>を取るのはいかがか

〔滾繡毬〕

卿は申すか  
呉越<sup>せん</sup>の銭王<sup>せんこうしゆく</sup>（銭弘俶）

<sup>22</sup> 以上の四句（妻・子・船・車）の順は、『風雲会』『雍熙樂府』は船車妻子、『詞林摘艷』は妻子船車、本書底本は妻車船子となっている。仮に『詞林摘艷』に従って改めた。

<sup>23</sup> 五代十国のひとつ・北漢の建国者。

<sup>24</sup> いまの山西省長治市。



南唐の李王（李煜）  
南漢の劉鋹  
後蜀の孟昶はいずれも  
仁政を布かず  
人々を失望させ  
霸道を行って  
民草の災厄なりと  
誰をか遣わし西川を鎮護させん（西川は四川）  
誰にか命じて兩広を平定させん（兩広は広東・広西）  
呉越を取れるは名将だけ  
江南を下せるは忠良のみ  
計をさだめて版図を広げん  
天を支える白玉の柱よ  
汝をもちいて天下を救わん  
海に架かる黄金の橋よ<sup>25</sup>  
仔細慎重に考えられたし

〔脱布衫〕

金陵攻略にいそぎ長江を渡れ<sup>26</sup>  
錢塘へ赴きかの地を平定せよ  
西川への険しい栈道に怯むな  
南蛮に漂う瘴気にもめげるな

〔醉太平〕

陣は虎狼を衝き  
身は風霜を冒す  
六韜三略（兵書）もて辺境を平らげんと  
統帥の印章を預かるべし  
威風ひきたつ鉄の鎧の人と  
足止めできぬ玉の轡の馬で  
金の鐙に鞭の音も高らかに  
はやばや汴梁（開封）に凱旋せよ

〔一煞（煞は結尾）〕

天の心に沿い  
天の理に通じ  
邪を離れ正に帰する者は  
だれも咎めはせぬものの  
王の業と争い

<sup>25</sup> 「白玉の柱」「黄金の橋」ともに傑出した人物を喩える慣用句。

<sup>26</sup> 『風雲会』ではこの前に、趙普の推挙した四人の將軍（曹彬・石守信・王全斌・潘美）に使者が出され、呼ばれた四人がやってくる一段がある。以下の歌詞はそれぞれ呉越・南唐・後蜀・南漢の攻略を命じる。

王の兵に<sup>あらが</sup>抗い  
武を誇り威を掲げる者は  
すべて根だやしにすべし  
民の財を<sup>かす</sup>掠めるなかれ  
民の命を害するなかれ  
民の妻を淫するなかれ  
民の家を燃やすなかれ  
兵馬をいたわり<sup>じん</sup>と法もて治めよ  
支給はしっかり賞と罰とを定めよ  
町を保守し逆賊を帰順せしめよ  
道に告示し民衆を安堵せしめよ  
救済のため備蓄庫をひらけ

〔尾声（終曲）〕

朕の待ち遠しいのは  
威儀をただした立派な姿で  
凌<sup>りょうえんかく</sup>煙閣に飾られる汝ら功臣の肖像  
鐘<sup>しょうていひぶん</sup>鼎碑文に刻まれて  
青史に芳名をきつと<sup>とど</sup>留めよ  
用兵よくする名將は  
たくらみ深く勇敢で  
天文仰いで星を占い  
山川眺めて地を<sup>わきま</sup>弁う  
作戦には先ず地形を知ること  
決戦には必ず離間の策をとれ<sup>27</sup>  
白昼戦には旗と<sup>さしもの</sup>指物  
夜間戦には火と太鼓  
白兵戦なら群雲にて陣幕まもり  
水上戦なら風に乗り軍船すすむ  
奇道正道を織りまぜれば兵勢は最強  
仁と智とを兼ねそなえた武勇は無敵  
この地を定めるは將軍にまかせ  
かの地を取るのは統帥にたよる  
急使おくり辺境より<sup>しゅうほう</sup>捷報を奉り  
太平みなで慶賀して京城へ帰れ  
領地をあたえ大臣につける際には  
まず汝が各部隊の軍卒に  
あつく褒美をとらそうぞ

※本稿は科学研究費補助金（23K00335）による成果の一部である。

<sup>27</sup> 曲選ではいずれもこの句が脱落しているので『風雲会』により補った。以上二句、原文では「九地」（さまじまな地形）、「五間」（各種の離間の策）といずれも『孫子』に由来する表現を用いる。